IACR 学術会議参加報告

HIRABAYASHI Mayo
平林 万葉
国立研究開発法人国立がん研究センター

2025 年 11 月にトルコ西部の港湾都市イズミルで開催された、International Association of Cancer Registries（IACR）の学術会議に参加した。これまで IACR の活動については文献や「Cancer Incidence in Five Continents (CI5)」などデータベースを通して知っていたが、実際にコミュニティの熱気に触れられたことは新鮮で、多くの学びを得る経験となった。

会議では、各国のがん登録の質の向上に向けた取り組みや、データ標準化における課題、地域特異的ながんの負荷に関する報告など、多岐にわたる演題が発表された。これらのセッションを聴講することで、がん登録を整備・維持するための方策や、現在各国が直面している課題を知ることができた。今回の会議がトルコでの開催されたため、中東やアフリカ地域からの参加者も多かった。これらの医療資源の制約が大きい低・中所得国が抱えるがん登録の課題は、アジア地域とも共通する部分があり、改めてがん登録の根幹を支えるための国際的な支援の重要性を感じた。

会場では、セッションの間に以前博士研究員として所属していた International Agency for Research on Cancer の研究者に再会したり、各国の専門家たちと有意義な意見交換を行った。研究デザインやデータ解析の工夫だけではなく、国際比較の際に留意すべき制度の違いなど、実践的な知見を得られたことは大きな収穫の一つである。

また、国や制度が異なっても「質の高いがん登録データから住民の健康に還元する」という共通した目的意識が専門家たちの連帯感の源になっていることも実感した。トルコという多様な文化が交差し共存する地で、世界各国のがん登録の専門家たちが議論を交わす様子は、その国境を越えた連帯の強さを象徴しているようだった。

会議の終わりにイズミルの街を散策した。海沿いのプロムナードや、市場の活気ある雰囲気、街の人々の温かさは印象深く、街の文化の豊かさに触れることができた。今回初参加ということもあり、緊張も覚えたが、世界の動向を実感し、多様な背景を持つ研究者と交流ができたことで、研究の視野が広がっただけではなく、今後、自身の研究をどのように位置づけ、社会へ還元していくべきかを考える機会になった。今回の学会参加を通じて得られた学びとつながりを礎に、研究を進めて行きたい。